慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	主体・他者・ジェンダー : 現代社会理論における他者の問題
Sub Title	
Author	吉澤, 夏子(Yoshizawa, Natsuko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.186- 193
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0186

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

博　士（社会学）［平成 16 年 7 月 14 日］

乙　第 3816 号　吉澤　夏子

主体・他者・ジェンダー—現代社会理論における他者の問題—

〔論文審査担当者〕

主　査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
社会学博士　藤田　弘夫

副　査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
教育学修士　渡辺　秀樹

副　査　慶應義塾大学文学部教授大学院社会学研究科委員
文学修士　浜　日出夫

副　査　名古屋大学大学院環境学研究科教授
博士（社会学）　西原　和久

〔学識確認担当者〕

慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
教育学修士　渡辺　秀樹

内容の要約

本論文は，「主-客二元論的な理論枠組みの限界を踏まえたうえで，それをどのように刷新していくのか」という，20 世紀初頭以来社会学の理論展開において重要な理論的課題として常に意識されてきた問題に関わっている。「近代的なもの」をめぐる問いは，主-客二元論の枠組みによって記述・解明されてきた。しかし今われわれが生きているこの現代社会は，近代社会の構成とその基本的な部分を共有しつつ，それとはある確かな偏差をもって現れている。今まで自明で確実だと思われていたさまざまな「近代的なもの」が疑問に付され，とりわけ主体/客体という対立図式の有効性や人間という主体の概念が揺らぎ始めている。現代社会理論は，このような近代社会の「現代的」変容という複雑な様相を主題化するという共通の課題を負っている。

この課題を強く意識し，社会理論を「基礎づけ」の意志の下に刷新しようとしたのが A. シュッツである。フッサール現象学によってヴェーバーの理解社会学を「基礎づけ」ようとしたシュッツは，社会科学者たちが暗黙のうちに自明視してきた社会的世界そのものの構成を明らかにしようとした。社会的世界の中でもっとも自明なものは他者の存在である。シュッツは当然他者を疑いうるものとして「問題」にした。しかしこの問題に対するシュッツの態度は矛盾に満ちていた。シュッツはそれを徹底的に問いつづけることはせず，その問いを途中で停止したのである。そのためにシュッツの学には〈超越論的レベル〉と〈内世界的レベル〉という〈二つのレベル〉の断層が残ることになった。そして最終的に，他者の存在という問題＝間主観性問題を〈内世界的レベル〉でこそ解かれる問題だと考え，その学的営みの重心を社会的世界の精細な記述へとシフトさせた。

このようなシュッツの仕事は，社会学史上特異な位置を占めている。シュッツの学における〈内世界的レベル〉への内属という転換は，間主観性の問題を「基礎づけ」の問題から解放し社会学的な問題と

して主題化する道を開いたという意味で，その後の社会理論の展開にとってひとつの「転換点」となった。それまで自明の前提として問われなかったさまざまな事柄を，端的に無視するわけにはいかなくなったのである。そして「他者の存在」に対してどのような態度をとるのかによって，その後の社会理論の展開は大きく二つの方向性をとった。一つは社会構築（構成）主義的な方向性，いわゆるコンストラクショニズムとよばれる潮流である。それは社会科学のよって立つ基盤である日常生活世界における人々の相互行為・相互理解（つまり他者との関係性）を直接の対象とし，人々が暗黙のうちに共有している解釈装置の析出や，行為者の主観によって社会＝現実リアリティが，いかにさまざまに構成されるか，を明らかにする。この方向性は他者の存在に対してシュッツが最終的にとった態度をそのまま踏襲した。つまり他者の存在をいつでも疑いうるという態度を保持しつつ，さしあたって他者の存在を前提とした（「他者の括弧入れ」）。そしてシュッツの中に最後まで残りつづけた「基礎づけ」の動機を払拭し，社会的世界の微細な研究――エスノメソドロジー，会話分析，リアリティ構成論，社会問題研究など――に向かった。こうした方向性はシュッツの学的系譜に直接繋がるものであり，シュッツの仕事の「出発点」としての意義を体現するものである。

もう一つは，社会生成（構成）論的な方向性で，他者の存在という問題＝パラドクスを理論化の営みの過程に組み入れること（「他者の取り込み」）によって，社会理論全体を刷新し，主-客二元論を克服しようとする試みである。その中で，とりわけ洗練された理論展開を行なっているのが，N. ルーマンである。ルーマンは，〈内世界的レベル〉への内属をさらに徹底し，社会理論それ自体を〈メタ理論〉的に展開しようとした。つまり，メタ理論/理論という対立を超えて，その関係自体（他者の存在の自明性を疑うという「超越論的な問い」）を社会理論の側から包括して，シュッツにおいて最後まで残りつづけた〈二つのレベル〉が「一つ」であるような世界を志向したのである。ルーマンのラディカル構成主義の立場は，近代社会の「現代的」変容としての現代社会に正確に対応している。本論文では，ルーマンの議論の核心的な意義を，「時間」，「世界」，「観察」，「他者」という四つのテーマに即して論じることによって，その試みがどのようなものであるかをさまざまな角度から明らかにしている。そこでは，とりわけルーマンの議論がいわゆる主体理論・意識哲学の伝統とどのように距離をとっているか，という問題が重要である。彼は近代社会の成立以来，人間＝主体という概念に与えられていた特権的な位置を相対化しようとする強い意志の下，その独自のオートポイエーシス理論，自己指示的システム理論を展開しているのである。そこでは，人間はさまざまなシステムが複合的に働く場のようなものとして捉えられている。

最後に，このような基礎理論的な考察を踏まえたうえで，近代社会の「現代的」変容という事態が具体的にどのような社会現象に即して現れているのか，そしてそれが「主-客二元論の枠組みの刷新」という理論的課題とどのような関係にあるのか，について論じる。まずフェミニズムという典型的な近代の思想が現代社会において直面している「困難」を，「差別の二重化」という概念によって明らかにし，男性/女性＝差別する/差別されるという単純な二項対立図式では，その「困難」の実態を捉えられなくなっているということをさまざまな角度から主題化する。次に70年代以降現代社会理論にジェンダーという概念が導入されることによって，性的差異についての捉え方がどのように変容したのかについて概観し，構築主義にもとづくジェンダー――元論の批判的な検討から，「性的身体としての人間」という概念の重要性を指摘する。またジェンダーを権力として把捉する考え方の意義と限界を社会学の権力論との関連で明らかにしつつ，女性という「性的身体」や「美」をめぐる問題をとりあげ，どのような社会

学的説明が可能なのかを示すことによって，いかにジェンダーが社会的に構成されて在るかを明らかにする。

「女性も人間である」という近代のテーゼ，そして「個人的なことは政治的である」というラディカル・フェミニズムのテーゼは現代社会の中でその限界を露呈している。それは，性的身体である人間（男性と女性）が主体でありうるか，という根本的な問題に繋がっている。こうした困難な状況を克服するためには，〈自由な社会〉がいかにして可能かを問うこと，およびラディカル・フェミニズムに対する的確な評価と批判にもとづいて，「個人的なものの領域」を個人的なままにとどめておくという選択の可能性を探ることが何より重要な課題となる。

論文審査の要旨

I　論文の課題と構成

本論文は，現代社会理論における他者の問題を主体とジェンダーに焦点を当てながら展開しようとしたものである。本論文は序章で主客二元論の枠組みを展望した後，第1部の「現象学と社会学」で，A. シュッツの研究の意味を，第2部の「社会学の〈メタ理論〉的展開」でN. ルーマンの世界を論じる。第3部は，フェミニズム思想とジェンダー概念を現代社会理論との関連で論じる。本論文は独特の3部構成とっている。そして最後に，補論として，性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤を扱っている。

本論文の内容と目次は次の通りである。

序章　主客二元論の枠組みを超えて
第1部　現象学と社会学　—A. シュッツの仕事の意味
第1章　転換点としてのシュッツ
　第1節　隠されていた問題
　第2節　自然的態度の構成的現象学
　第3節　〈内世界的レベル〉への内属
　第4節　〈私〉の立場の徹底
　第5節　転換点としてのシュッツ
第2章　出発点としてのシュッツ
　第1節　現象学的社会学
　第2節　社会科学におけるガリレイ論
　第3節　〈私〉　—体験と意味
　第4節　まなざしの交錯
　第5節　他者を理解するということ
第2部　社会学の〈メタ理論〉的展開　—N. ルーマンの世界
第3章　不可逆性のメタファー
　第1節　理論のはじまるところ
　第2節　ハイデガーの時間論
　第3節　二つの現在　—時間生成のメカニズム
第4章　世界と〈できごと〉

第1節　「自己指示的」システム理論
第2節　世界を経験するということ
第3節　〈できごと〉の影
第5章　観察と他者性
第1節　観察者＝行為者
第2節　脱パラドクス化という営み
第3節　社会性を刻印された行為
第6章　他者の経験
第1節　現代社会理論における他者の問題
第2節　不透明な他者
第3節　愛の関係　―〈できごと〉としての愛
第3部　現代社会理論におけるフェミニズム思想とジェンダー概念
第7章　〈自由な社会〉とフェミニズム
第1節　近代社会とフェミニズム
第2節　フェミニズムの困難
第3節　ドウォーキンの光と影
第4節　個人的なことは個人的である
第5節　ラディカリズムとリベラリズム
第8章　ジェンダーという概念装置
第1節　性別という規範
第2節　ジェンダーの果て
第3節　ジェンダーの権力
第4節　美をめぐる問題
第5節　虚構としての性的身体
補論　性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤　―『平凡』における〈若者〉のセクシュアリティ

Ⅱ　論文の要旨と概要

本論文の第1部は，シュッツを論じる二つの章から構成されている。焦点は，社会理論の転換点・出発点としてのシュッツ理論の考察である。そこで著者は，シュッツ以降の社会理論が示してきた，自己や他者の存在を自明視して社会理論を展開する「社会構築（構成）主義的」な方向と，それらを自明視せずに問い直す「社会生成（構成）論的」な方向を提示しつつ，後者の方向がシュッツによって切り開かれたと位置づける。

第1章は，「転換点としてのシュッツ」と題され，シュッツが行った社会的世界の本質構造の精密な記述，つまり「自然的態度の構成的現象学」がどういう社会学的位置にあるのかが論じられる。シュッツの学問は，彼が影響を受けたフッサール超越論的現象学の「超越論」という立場を放棄して，われわれが自然的態度（内世界的レベル）でこの世界をどのように経験しているのかを問う立場であり，一種の「社会的世界の存在論」である。そしてこの議論は，いままで社会学において「隠されていた問題」であった。

この問題を著者は，シュッツの著作の内容をたどり直しながら示し，〈私〉の立場を徹底して追及しながらも，独我論的ではなく「間主観性は生活世界の所与」であるとするシュッツの立場を鮮明にする。そしてそれは，シュッツが後にフッサールを批判する点であることも論証される。要するに，シュッツが「相互行為を営む私がいかに他者を経験し「われわれ関係」を成立させているかを確認していったとき，そこにはその主観自体がすでに前提にしている何か，その主観自体にすでに含まれている何か，つまり間主観性が逆照射されるかたちで浮かび上がってきた」と筆者はまとめるのである。

第２章は，以上の議論を現象学的社会学というもう少し広い文脈で具体的に捉え直す作業であり，まずシュッツの学的動機が，「自明なものを疑う」姿勢，ペシミスティックな科学観，生きられる世界の主題化とまとめられ，科学と生活世界（および社会科学の方法論），体験と意味，他者理解に関するシュッツの見解が整理される。そこで筆者が着目したのは，反省されることのない体験としての，私の「本質的に直接的な体験」であり，それゆえ他者理解の原理上の不可能性である。しかし同時に，共在する（「われわれ関係」にある）自他は準「同時的」にまなざしを交錯させ，ベルグソンが言うように「一つであっても二つであっても違いのない二つの流れ」となる点にも著者は着目する。ここには「他者の取り込み」が見られるからである。ただし，この二つの議論の間には一種の断絶がある。この問題点は，超越論レベルと内世界的レベルの議論に関するシュッツの不徹底な姿勢――シュッツが批判したフッサールは，「独我論的な学問が徹底的に遂行されていけば，それは自ずと超越論的な間主観性の現象学へといたり，独我論は見せかけであったことが，のちになってはじめて了解される」と考えていた――とともに，シュッツの曖昧さであるとされる。だが，こうした問題点はあるにせよ，シュッツの「自然的態度の構成的現象学」は，フッサールも考慮に入れたルーマンの社会理論の〈メタ理論〉的展開へとつながっていく「社会生成（構成）論」の出発点に立つ業績である，と著者は位置づけるのである。

本論文の第２部「社会学の〈メタ理論〉的展開」は，ルーマンの自己指示的システム理論が，シュッツによって切り開かれた，社会理論の「社会生成（構成）論的」な方向性を継承するものとして位置づけられ検討される。そのさい著者が，ルーマンの自己指示的社会システム理論の基底にあるものとして注目するのが「できごと」という概念である。第２部は，この「できごと」概念を，「時間」（第３章），「世界」（第４章），「観察」（第５章），「他者」（第６章）という四つの視角から多面的に考察することによって，ルーマンの自己指示的システム理論をその基本的な世界観にさかのぼって解明しようとするものである。

第３章では，ふつう自明なものと考えられている，不可逆なものとしての時間という表象が，いかにして「できごと」から生成するのかという問題が，ハイデガーも援用しつつ論じられる。「できごと」は生成しては消滅していくものであるが，たえず他の「できごと」に接続され，この接続の効果として，時計やカレンダーによって表されるような不可逆的な時間という仮象が生み出されるとされる。

第４章では，世界が秩序を備えたものとして経験されるということがいかにして可能であるのかという問題が検討される。ルーマンによれば，世界は，生成しては消滅していく「できごと」と相関して現われるものであり，したがって，世界もまたたえまなく生み出されては消え去っていくものである。にもかかわらず，日常生活では世界はつねに秩序あるものとして経験されている。それを可能にしているのは，「できごと」のただなかに立ちつつ，「できごと」から時間や意味を切り離し，「できごと」を忘却する「脱パラドクス化」という営みであることが示される。

第５章では，ルーマンの観察概念が，ウェーバー，シュッツの理解社会学の伝統も参照しつつ論じら

れる。ルーマンは，主体である私とは独立に世界が存在し，その世界を私が外側から観察するという，近代的な主-客二元論の枠組みを否定する。ルーマンによれば，観察者はつねに観察している世界に内属しており，したがって観察は自己指示的であるとされる。そして，この自己指示のパラドクスをたえず脱パラドクス化することによってはじめて世界が可能となっていることが示される。このような世界のありかたが「ありそうなもののありそうもなさ」と呼ばれる。

第6章では，ルーマンの自己指示的システム理論において，他者がどのように扱われているかが結論的に論じられる。ルーマンにおいて，他者とは絶対的な差異である。にもかかわらずわれわれは他者を不断に経験している。これはいかにして可能であるのか。私と他者との出会いは「できごと」において生じる。「〈できごと〉における――同時性における――他者の経験は，他者とともに，私という同一性が同時に構成されるような，したがって，それは私が私でなくなるかもしれない，というきわめて危険な局面を含んでいる」(93頁)。私が私でありつつ同時に他者でもあるというこのパラドクスを脱パラドクス化することによってはじめて，他者の経験は可能となる。だが，著者は，この他者は「他者性を喪失した他者」(同)，「他者の痕跡，記憶」(同) であると言う。そして，著者は，絶対的な差異としての他者の他者性を体験しうる「できごと」の事例として「愛の関係」をあげている。

本論文の第3部は，第1部・第2部の基礎理論的考察を踏まえて，フェミニズムとジェンダーという概念装置が主題化される。第7章「〈自由な社会〉とフェミニズム」では，男性/女性，という単純な二項対立図式では，現代社会の問題を捉えることができなくなっていることを，フェミニズムの「困難」として論ずる (2節)。そこでは現代社会に特徴的な男性/女性の布置関係は，男性と女性の間にある差別と，女性のなかにある差別＝序列化という「差別の二重化」として把握される。この「差別の二重化」という差異の構図から女性たちは逃れられないというのが現代の状況である。このことの徹底的な命題を70年代のラディカル・フェミニスト，アンドレア・ドウォーキンの「性関係はすべて性差別である」というテーゼに見出し，そこから，「個人的なこと」を社会の構図に絡め取られない個人のままにしておく可能性を探ることの大切さを論ずる。つまり「個人的なことは政治的である」というラディカル・フェミニズムのテーゼの画期的な意義を確認した上で，なお「個人的なこと」を個人的なままにとどめておくことの可能性をアン・マクリントックの「帝国の革ひも」における愛の関係を取り上げて論ずる。個人的なままにとどめておくことが，自己の行為を制御しているという感覚や自尊心・自立心を掬い取る可能性をもたらすし，個人的なものの領域に対する尊重や理解を可能にもするのである (3・4節)。

第8章「ジェンダーという概念装置」では，まず70～90年代のジェンダー概念の変遷が，バトラーを中心に論じられる (2節)。次にジェンダーの権力が，個々の男性/女性の具体的な関係性において作用する微細な権力として説明される (3節)。最後に美をめぐる問題を取り上げ，これまでの議論を踏まえて，フェミニズムの困難と，その対応として，個人的なことを個人的なままにしておくことの可能性を説いている。

Ⅲ　論文の独自性と課題

本論文は議論の筋道をはっきりと立て，付随するさまざまな論点を長い注に回しながら力強い論述と鋭い議論を展開によって読者を魅了する。しかし本論文を構成する三つの部分は，かなり独立したものと見える。理論を論じた第1部，第2部とジェンダーを扱った第3部にはテーマの設定の仕方にも，議論の展開の仕方にも大きな断絶がある。さらに理論を扱った第1部と第2部も議論の展開のスタンスにかなりの違いがある。しかし本論文の一見すると，ばらばらのように見えるこの3部構成にこそ，本論

文の隠されたもうひとつの独創性が潜んでいる。

西洋近代以降，人間と社会の関係は，さまざまなかたちで頻繁に問いかけられてきた。安全，権力，支配，民主化等の問題はホッブズ，ロック，ルソー，モンテスキューによって，斬新な議論が展開されてきた。かれらは，当時の封建的，身分的な関係の克服が，理想的な社会や国家の建設に必要だと考えたのである。そこでかれらは，社会を構成する人間の〈主体性〉や〈我の自覚〉の確立を求めたのである。当時の思想家は人間の心理や行動が突き止められれば，理想的な社会の建設が可能となると考えたのである。こうしてかれらは，道徳的側面から人間の本性 (Human Nature) を分析していったのである。

その後の西洋における資本主義の発展は，社会を根底から変えていった。19 世紀も半ばになると，社会の矛盾はもはや人間の本性の分析によってしては，解明することが不可能であると認識されてきた。人間の意志を超えて貫徹する「法則」にこそ，社会の原理が存在するとの考え方が強まっていった。わけても，マルクスが社会を資本の運動をライト・モティーフとして分析したことは，画期となった。人間が自己の意志とは無関係に取り結ぶ，社会関係の重要性が認識されていった。社会の法則的認識はマルクス主義者にとどまらず，その後の社会科学の研究を席巻した。以後，客観的な社会法則の発見こそが，研究者の関心の的となる。デュルケームの「社会学主義」も，そうしたなかで提唱される。

マルクスは経済的利害から生み出される社会の客観的法則と人間の主体性を〈弁証法〉をもって巧みに結びつけた。それに対抗したのが，マックス・ウェーバーである。かれは，経済の論理が社会に一義的な結果をもたらすのではなく，いかに多様な帰結をもたらすのかを，個人行為の動機の理解にまで遡りながら，明らかにしようとした。ウェーバーは社会研究における行為者の「主観性」の重要性を取り戻そうとしたのである。しかしかれは社会研究における個人の動機理解という画期的な方法論を提唱しながらも，この方法論を深めることなく，かれの理解社会学は，もっぱら社会形象の「類型」化にむかったのである。

ウェーバーが途中で放置したこの行為の主観性の問題を，フッサールの現象学に学びながら突き詰めようとしたのが，A. シュッツである。本論文はかれの研究からはじまっている。本論文の第 1 部，現象学と社会学は先に見たように，この点を転換点としてのシュッツと出発点としてのシュッツとして見事にまとめられている。

もちろんこのシュッツ論にまったく議論の余地がないわけではない。なるほど，第 1 部の議論の展開は明快なものであり，著者の問題意識が明確に示された興味深い展開となっている。著者の現象学理解に関する力量も随所で感じられ，さらにシュッツとルーマンの基本的視座との関連づけという試みは，社会学におけるシュッツの位置づけとしてきわめて刺激的なものである。しかしシュッツの項目の記述の量的な薄さから，シュッツの時代的な変化には必ずしも配慮されておらず，シュッツの全体像から見れば不足感が残る点では否めない。たとえばシュッツとフッサールの関係はもっと複雑な関係であったのではないかと問うこともできる。しかし著者はその細部には立ち入ろうとしない（そのことは，シュッツの引用に頁数が示されていない箇所もあることに関係するのだろう）。もちろん，それは論点を明示するためには脇道に入らないという戦略としては十分認めることができる。筆者の狙いは，転換点・出発点としてのシュッツの側面を描き出すことに焦点があることを考えるとすれば，以上の問題点は杞憂にすぎないのかもしれない。なによりもこうした作業によって，著者の展開する「社会生成（構成）論」の方向性は確実に明示化されたからである。

著者は第2部で，シュッツの他者理解をさらに進め他者を社会理論に組み込んだとするN. ルーマンの世界に分け入ることとなる。そこでは，理論とメタ理論の区別がなくなるとともに，他者が社会理論のなかに取り込まれることとなるという。ルーマンの自己指示的システム理論は，通常，社会理論のひとつとして検討されまた考察されている。これに対して，著者の議論の特徴は，ルーマンの自己指示的システム理論を，単に社会理論としての有効性に焦点を当てて検討するのではなく，その根底にある世界観と関連させて，その意義を論じるところにある。その結果，それが「社会生成（構成）論的」な社会理論の可能性を極限まで展開したものとして位置づけられることが明快に示されている。この結論はたいへん説得力があり，また独創性に富んでいる。この点，高く評価されるものである。しかしその一方で，著者によってルーマン理論の根本的な概念として取り出された「できごと」概念がいかにして経験的な研究に接続されうるのかという点は今後の課題として残されたといえる。

第3部では，他者の問題は現実のなかで語られる。他者として一般化されるものではあっても，男と女の違いは社会のあり方に決定的な影響を与えている。著者は先に論じたように，「個人的なことは政治的である」という圧倒的なテーゼのもとで，フェミニズムの困難に対応する理論的な格闘を真摯に展開している。そしてこの圧倒的なテーゼを認めた上で，それを出発点として踏まえた上でなお，「個人的なことは個人的なままに」というテーゼの可能性と意義を説得的に示している。ここには二つのテーゼの存在論的性格と認識論的性格の違いを含みながらも，このことがさらなる議論の展開の地平を示しているように思えてならない。

また，補論の「性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤」は，雑誌『平凡』で1960年代の終わりから1970年代のはじめに描かれた若者の性が，恋愛至上主義と純潔主義という二つの契機のなかで揺れ動いていることを分析する。本論文は序章で全体構成が提示されているが，第1部，第2部，3部が終わったところで，あらためて総括の章を設定しても良かったのではないかと思われる。

ともあれ，本論文は理論的にも扱うテーマの点でも，社会科学の行き着いた到達点のひとつとなっている。社会の探求は人間の本性の追求からはじまり，社会法則の発見の時期を経て，主観性の考究へと移っていった。著者の社会学における，こうした議論を可能にしたのは，フッサール，ハイデガーなどの20世紀哲学への深い理解である。そのことは，ルーマンの大胆な理解やジェンダー論のダイナミックな議論の展開となって表れている。

そのことは，また，本論文が近代の社会科学の出発点となった「理想の国家」や「民主主義の問題」でも，社会科学が大きく展開する契機となった「貧困の問題」でもなく，まさに1960年代以降に顕著となったフェミニズムやジェンダーの問題を〈他者の概念〉との関連で論じたことに表れている。その意味で，第1，第2部の理論編と第3部の実態編は表面上の乖離と裏腹に，根底で密接に関係しているのである。

Ⅳ　審査結果の報告

本論文はこれまでの社会学理論と社会問題に，斬新な視点と画期的な成果をもたらした。それどころか，本論文はさらなる課題の提起とあらたな議論の展開のもたらす可能性を秘めている。こうした観点から，吉澤夏子君提出の本論文は，社会学の研究に広範な可能性を切り開いた独創的な業績として，審査委員一同は博士（社会学）の学位の授与に値するものと判断した。